

レーザーコンパス

## 新・和魂洋才論

小野 公三\*

Kimizo ONO\*

少し前にドイツのマックス・プランク研究所の生命科学の研究者であるメーヴェス博士に会ったとき、「米国には抜群の優れたアイデアを多少荒削りであっても比較的短期間に磨き上げて世界的な成果を出すという科学文化があり、一方欧州先進国にはひとつの比較的狭い領域を一生かけてきれいな体系にまとめ上げるといふ別の科学文化がある。日本人科学者は決して創造性がないとは思わないが、優れた日本人は実は米国型か欧州型のいずれかで、日本独自の科学技術文化というものがある。したがって日本に外国人研究者を積極的に受け入れる国際的研究機関ができたとしても、日本に魅力を感じて入って行く欧米の研究者はあまりいないのではないか。」という厳しい意見を聞いた。日本には、独自の科学技術文化がないのであろうか。

一方では、明治維新以来必死になって先進欧米に全面的に見習い、追いつくことに専ら努力してきたわが国が、ようやく最近になって「生産技術では世界一」などという自信を持つにいたり、ついには「もはや欧米に学ぶべきものは何もない」という極端な意見まで出てきた。さらにはバブルの崩壊を経て経済的苦境に入り、

つづいて米国の製造業復興の兆しを見て、まともや自信を失いかけているという面も見られる。

このように右往左往してしまうこと自体が、メーヴェスのいう「日本独自の科学技術文化の無さ」を、少なくともその存在を自覚できていないことを示しているのかもしれない。たとえば基礎的研究に従事する研究者についても、欧州には一種のノブレス・オブライジのような倫理観があり、自由を享受する一方で強い責任感を持っている面があげられる。米国には、人種・国籍を問わず世界中から能力とエネルギーを持った人々が集まり、熾烈な競争下で切磋琢磨して成果を出すという雰囲気がたしかにある。日本が科学技術立国をかけた科学者や技術者にとって魅力ある国になるためには、日本独自の科学技術文化を育成し、その存在を示して行くことが必須であろう。

しかし、わが国の科学技術を取りまく環境と発展の歴史を見ると、実はわが国なりの科学技術文化らしいものが厳然として存在していることに気づく。明治維新の殖産興業を支えた江戸時代以前の知的文化の蓄積、戦後の驚異的復興を可能にした全員参加の応用技術開発の知恵、

\*住友電気工業株式会社マルチメディア室(〒107 東京都港区元赤坂1-3-12)

\*Multimedia Planning & Promotion Dept. Sumitomo Electronic Industries, Ltd (1-3-12 Motoakasaka, Minato-ku, Tokyo 107)

高い品質を維持できた生産技術など、それなりの裏付けがあつたことであると自信を持ってよい。ただこれらを欧米よりも優るとか劣るとかいう方向へ進むと議論がおかしくなる。大切なのは、謙虚に、かつ自信をもって日本のやり方を自覚し、その良い部分を自らの礎として着実に育成・発展・定着させることである。

日本は今後、工業社会から高度情報社会へ移行してゆくことが必然的に求められているという。現状のわが国の科学技術文化を、与えられたものとして固定的に捉えるのではなく、積極的に時代に則したものに变革してゆく必要があ

る。このためにはけっして傲慢におちいることなく、欧米をはじめとする外国の良い面は冷静に認めて、同時に自分のアイデンティティを失わずに自分なりのものとしてそれらを取り入れて行くこと、すなわち新しい「和魂洋才」が今後より一層重要になると考える。

今回の特集である半導体レーザーは、幸いにして世界でもトップクラスのレベルを保っている分野である。これを支えているわが国の文化・環境をよく見つめて考えを深めることが、新しい「和魂」を自覚・育成するひとつのヒントになるのではないかと思う。